

# 明治村 だより

春号 Vol. 43

目次

- 有栖川宮邸の家具 .....2
- 明治村茶会の四十年 .....6
- 「明治を探る—明治村お宝探訪」展示紹介 ...8
- 春の明治村—催しものご案内 .....10
- A La Meiji-mura .....11



平成18年2月25日発行  
 「明治村だより」第43号 (平成18年 春)  
 発行 博物館明治村  
 〒484-0000 愛知県犬山市内山一番地  
 電話 (0568) 67-0314  
 ◎ホームページ <http://www.meijimura.com>  
 製作 大日本印刷株式会社

【明治村 だより】 第44号発行のお知らせ  
 発行時期 平成18年6月(予定)  
 申込方法 「明治村だより」第44号ご希望の旨及び  
 ご住所・お名前を明記の上、送料140円の  
 切手とともに封書にてお申し込み下さい。

お詫び  
 「明治村だよりVol.42」  
 6ページ「明治の家具」  
 文中8行目に誤りがあり  
 ました。お詫びし  
 て訂正いたします。  
 誤：二の丸御殿  
 ↓  
 正：西の丸御殿

# 有栖川宮邸の家具

## 1 はじめに

これまで、博物館明治村では赤坂離宮舞踏室で使用されたとしてきた長椅子が、調査の結果、明治十七年に竣工した有栖川宮邸で使用されたものと判明いたしました。今回は不十分ですが、速報的に現在までに知りえた情報をご紹介いたします。



有栖川宮邸で使用されていたと判明した長椅子

## 2. 有栖川宮家について

有栖川宮家は旧四親王家の一つで、寛永二年（一六二五）後陽成天皇の皇子が高松宮を称したのがはじめといわれ、その後一時絶えましたが、寛文七年（一六六七）に後西天皇の皇子幸仁親王が継承し、宝暦十二年（一六七二）に有栖川宮と改称し、威仁親王まで三百年あまりにわたった宮家です。

明治時代にかかわる有栖川宮は三名が数えられます。まずこの三名について簡単に紹介します。

### 有栖川宮威仁親王

（文化九年～明治十九年 一八二二～一八八六）



威仁親王は安政六年（一八五九）祐宮（後の明治天皇）の習字御師範となり、慶応四年（一八六八）神祇事務局督に就任したのを皮切りに神道總裁や皇典講究所總裁などを歴任し、神道の発展に尽くされました。また、有栖川宮家は歴代、書道および歌道にすぐれ、書道の「有栖川流」を大成したほか、五箇条の御誓文の正本も威仁親王の筆によるものです。

### 威仁親王

（天保六年～明治二十八年 一八三五～一八九五）



威仁親王は威仁親王の第一皇子で、十七歳の時、当時六歳だった孝明天皇の妹和宮と婚約しました

が、いわゆる和宮降嫁問題で、和宮は將軍徳川家茂との結婚が決まり、威仁親王と和宮の婚約は破棄されました。

威仁親王は父威仁親王が政治とは距離を置いていたのに比して、政治との関わりも強く、特に倒幕派と深くかわり、慶応三年王政復古の大号令が発せられると総裁職、一八六四年の戊辰戦争の際には官軍の総司令官として東征軍大総督に就任。明治三年には兵部卿、福岡藩知事、元老院議長、明治十年に勃発した西南戦争時には征討総督に就任しました。国会開設・憲法制定に力を尽くす一方、明治天皇から絶大な信任を得、明治十五年には天皇の名代として、ロシア皇帝アレクサンデル三世の即位式に参列、帰途欧州各国を巡遊しました。この時、建築家片山東熊（当時は工部省営繕局技手）が同行したことは、有栖川宮邸の室内装飾を考える上で非常に重要なことと思えます。帰国後は参謀本部長など草創期の陸軍首脳として重要な役割を果たし、さらに日本赤十字社總裁はじめ各種社会事業にも貢献しました。

威仁親王は上述した政治的な活動のほか、有栖川宮家としての家学である書道・歌道にも秀でており、明治四年からは明治天皇の御手習師範でもありました。

威仁親王には子どもがなく、親王薨去後は弟の威仁親王がその跡を継ぎました。

### 威仁親王

（文久二～大正二 一八六一～一九一三）

威仁親王は威仁親王の第四皇子で十代の頃にイ



ギリスに留学し、イギリス海軍の軍艦への乗組みも体験し、帰国後は海軍少尉・横須賀鎮守府海兵団長などを歴任しました。また、明治二十四年ロシアのニコライ皇太子来日の際、大津事件が発生しましたが、明治天皇の名代として接待役を仰せられた威仁親王は、威仁親王の献身的な対応により、事なきを得ました。

日清戦争中の明治二十八年に兄威仁親王が亡くなると有栖川宮家当主となりました。威仁親王は兄威仁親王ともども明治天皇の信任が厚く、皇太子（後の大正天皇）の教育係りである東宮輔導に任命されています。晩年は肺結核に苦しめられ、そのほとんどを神戸の有栖川宮家の舞子別邸で静養に努められました。

威仁親王は一男二女に恵まれましたが、王子を早くに亡くし、威仁親王薨去後は男系後継者がなかったため、有栖川宮家は断絶しました。

## 3 有栖川宮邸の建築について

有栖川宮邸は先述の威仁親王の住まいとして明治十七年に竣工したものです。日本における西洋

建築と建築学の祖であるコンドルが手がけた初期の邸宅建築として、そして宮廷建築史上本格的に洋風を導入した邸宅という二点において重要な位置を占めるものでもあります。

コンドルはここで申すまでもなく、日本での西洋建築の伝道者ともいえる存在で、明治十年に来日、工部大学校で教鞭を執る傍ら、建築家として



有栖川宮邸洋館（本館）正面



有栖川宮邸洋館（若宮館）南面

鹿鳴館などの公共建築や宮家等の大邸宅を多数設計しました。

有栖川宮邸は現在の国会議事堂の前にあたる霞ヶ関の一万坪を超える広大な敷地に、本館・若宮館のルネッサンス様式の洋館二棟と和館、そして別棟で土蔵・調理所が配置され、本館は熾仁親王用、そして若宮館は熾仁親王用として建てられました。

建設準備は明治十三年に有栖川宮家から宮内省への建築の願出に始まり、翌年宮内省から工部省へ工事の依頼がなされました。この建物の設計には熾仁親王自身も深く関わられたようで『熾仁親王行実』には「殊に内部の装飾に至りては、概ね親王の指示に本づきて、…(後略)」「親王が、建築に興味を有せられしは、周知の事実にして、霞関の新邸・舞子の別邸等は、専ら御考案に出て、



ジョサイア・コンドル



片山東熊

ません。家具のデザインについては九割方の部屋についてはどのような家具が使用されたのか、その図で判断することができず、どこで誰が作ったかとなると未だ具体的にはわかりませんし、記載のない部屋もあります。その一つが「階上(二階) 舞踏室(羽衣の間)」の家具です。舞踏室というと晩餐室(花鳥の間)や第一客室(朝日の間)につぐ、華やかな部屋であったであろうことは想像に難くないと思いますが、現在遺されている史料から一番その姿が見えにくいのが実情です。離宮内の写真も数多く残されていますが、羽衣の間は舞踏室という部屋の性格上、家具はほとんど写っていません。

この長椅子もご多分に漏れず、写真のようなラ

ベルを手がかりに「舞踏室II羽衣の間」という判断をしました。もちろん当初から「羽衣の間」と決断を下すには疑問点もありました。赤坂離宮の家具は部屋の内装にあわせた、様々な様式の家具が採用されています。『明治工業史』の記載の中には羽衣の間は、十八世紀末のアンピール様式で装飾されているとあり、この椅子のデザインとは

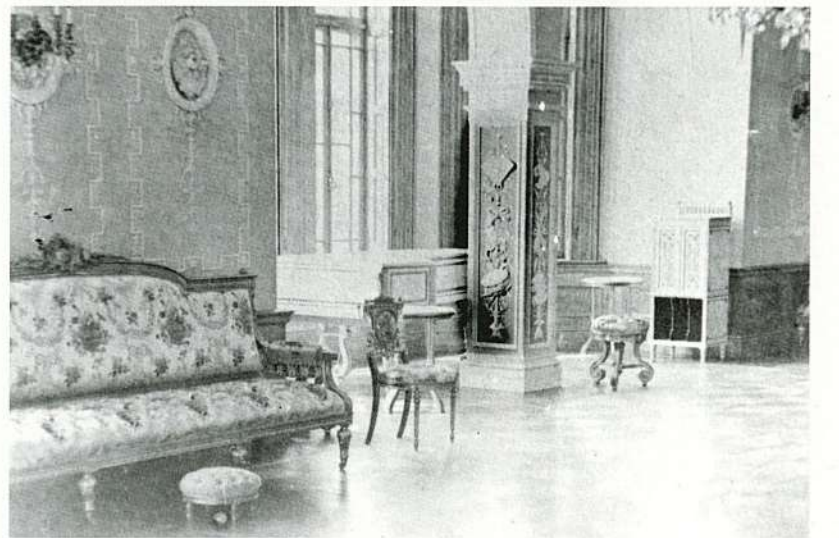
好んで、工作場を臨検せらる。」と記録されています。そのほかコンドルの助手・高原弘造が主任として、さらにコンドルが教えた工部大学の第一回の四人の卒業生の一人で、長州藩秋に生まれ、戊辰戦争には奇兵隊の一員として参戦したという経歴の持ち主の片山東熊、同じく工部大学第四回卒業生鳥居菊助が現場に派遣されました。

特に片山はこの有栖川宮邸の室内装飾を熾仁親王とともに担当し、先述の熾仁親王渡欧の際同行し、室内装飾品の調査・発注にあたりました。片山にとってこの経験は後の皇居・赤坂離宮造営やその室内装飾を行う上で非常に大きな役割を果たすとともに、この有栖川宮邸での室内装飾の実績が片山東熊を「宮廷建築家」たらしめた所以ともいえるでしょう。

建物は明治十七年の竣工の後、明治三十六年十二月に有栖川宮家が麹三年町の新居に移るまで有栖川宮邸として使用されました。明治三十七年に建物は宮内省へ移管されて、霞ヶ関離宮となり、また大正十年より十二年まで皇太子(後の昭和天皇)の東宮御所として使用されました。和館の一部は昭和十三年に大日本報徳社に移築されましたが、その他は昭和二十年に空襲で大半を焼失し、現在その様子を偲ぶことができるものはほとんどありません。

#### 4 明治村で収蔵している有栖川宮邸家具

冒頭に述べましたが、それまで赤坂離宮で使用されたとしてきた長椅子が、有栖川宮邸で使用された家具であることが今回判明した経緯を少し触れさせていただきます。また最大の疑問点が「階下 舞踏室」と記載された「階下」という点です。なぜなら赤坂離宮は二階がパブリックスペースで、一階は殿下・妃殿下のプライベートスペースという配置で、舞踏室も二階に設けられていました。ちなみに有栖川宮邸の部屋配置は、一階がパブリックスペース、二階がプライベートスペースと赤坂離宮とは全く逆であったことがわかっています。また未確認ではありますが、赤坂離宮は迎賓館



有栖川宮邸舞踏室に写された椅子

れることにします。

宮廷建築等についてはこれまでも少なからず研究の対象として各種文献が発行されてまいりましたが、「宮廷家具」となると、現代でさえ皇居の決まった、ごく一部の部屋のみがテレビや新聞雑誌の皇室関連ニュースの背景に映る程度で、一般人が目にする機会は少なく、広く研究の対象となりえなかつたという背景も否めません。赤坂離宮の家具については「東宮御所家具設計図」などの史料が遺され、それ以前の宮殿・宮邸に比べて比較的その内容がわかりやすいものでした。しかし「東宮御所家具設計図」も万全のものではあり

合致しません。また最大の疑問点が「階下 舞踏室」と記載された「階下」という点です。なぜなら赤坂離宮は二階がパブリックスペースで、一階は殿下・妃殿下のプライベートスペースという配置で、舞踏室も二階に設けられていました。ちなみに有栖川宮邸の部屋配置は、一階がパブリックスペース、二階がプライベートスペースと赤坂離宮とは全く逆であったことがわかっています。また未確認ではありますが、赤坂離宮は迎賓館



ラベル



椅子中央のメダリオン



有栖川宮家紋

#### 5 最後に

有栖川宮邸で使用された家具の調査はまだ始まったばかりで、不明な点も多々あります。今後、文献などで熾仁親王や片山東熊がヨーロッパのどこでどのような家具を選定したのかなどを明確にすることはできれば、現在は取り壊されて目にするにはできない有栖川宮邸の室内意匠を解明するのと同時に、日本の洋家具受容過程の一端をうかがい知ることができるのではないのでしょうか。

となった現在も、有栖川宮家の御紋の入った家具が若干収蔵されているということを知りました。家具に御紋は少々不釣合いな印象を抱かれるかもしれませんが、皇室家具には御紋そのもの、もしくはそれをアレンジしたデザインが多用されています。そんな視線でこの椅子を見てみると、椅子の背の中央のメダリオン装飾が有栖川宮家の御紋「十一葉の横見菊」であることに気づき、早速『コンドル博士遺作集』で確認したところ、有栖川宮邸の舞踏室の写真に写されているまさにその椅子でした。また、これらの写真では今のところ確認できませんが、同じ裂地で作られたカーテンも博物館明治村では所蔵しています。

# 明治村茶会の四十年

この春、明治村茶会は四十回を迎えます。

明治村茶会は石坂泰三氏・桑原幹根氏・小堀宗慶氏・千宗左氏・千宗室氏・千宗守氏・徳川義親氏・畠山一清氏・松永安左衛門氏・松下幸之助氏・松尾宗吾氏はじめ茶道界のみならず、財界・文化人の方々二十四名が発起人に名を連ね、運営委員には谷川徹三氏・谷口吉郎氏・田山方南氏・今泉篤男氏・小山富士夫氏・渋谷秀雄氏・竹内外茂氏・野田宇太郎氏・野崎幸三氏・吉田孝太郎氏ら十八名に就任いただき、趣意書には「(前略)明治村としましては、これら文化財を護つて永く後世に伝える一方、国民の皆様方にもより深くご理解をお願いするために、明治村茶会を開催しております。村内の各建造物を活用して、年に一回、春花秋葉の好季節を選んで、三席または四席の茶庭を開き、各席は、日本各所の美術館、記念館、あるいは個人のコレクションにご依頼しており、これによって、茶道を通じて、明治村への親愛感を深めて行きたい念願です。この茶会を通じて新時代にふさわしい、各方面の方から親しまれる茶会としたい所存であります。」と記され、第一回が昭和四十二年十一月に開催されました。

第一回は東松家住宅(徳川美術館)、森鷗外・夏目漱石住宅(松永記念館・小田原)、そして移築されたばかりの「長崎居留地二十五番館」(長崎県立美術館)で開催されました。翌年は学習院長官舎(石川県立美術館)・森鷗外・夏目漱石住宅(五島美術館)・東松家住宅(岡谷コレクション・名古屋)・西郷従道邸(京都国立近代美術館)で釜を懸けていただいています。お茶好きな方にとっては、正式な茶室ではない場所を茶席として使用することに抵抗を感じる方も少なからずいらつしやるかと思いますが、趣意書にもありますように、明治村への親愛感を深めていただくための茶会としての位置づけから、様々な建造物を利用して茶席を設けています。昭和四十四年の第三回からは時期を春に移し、席の数も当初は三席だった四席だったりしていましたが、昭和五十三年からは三席となり、

今日に至っています。通常は二日間の開催ですが、昨年は明治村開村四十周年にあわせ特別に三日間開催いたしました。

日本庭園が昭和四十五年に開設されてからは野点席として、翌四十六年に坐漁荘が移築されると濃茶席として、現在もこの二席は引き使用されています。明治村ならではの茶席としては、昭和五十五年の聖ザビエル天主堂(今泉篤男氏)、昭和六十二年以降の帝国ホテルや呉服座・無声堂が茶席として使用されました。特に聖ザビエル天主堂での茶席は「南蛮茶会」と題し、通常社寺で行われる献茶を、聖ザビエル天主堂内の聖母マリアへ捧げたものです。従来の慣習を打破し、一から創意工夫でもってつらえられた茶席は多くの参加者の心に残ったであろうことは想像に難くありません。

明治時代、茶道は多くの財界・文化人の人々にたしなまれてきました。その証拠に松永安左衛門氏(耳庵)・畠山一清氏(即翁)・根津嘉一郎氏(青山)らのコレクションは現代においても大変優れたものと評価を得ています。時代や流行に左右されない確かな道具を見極める「眼」は、単に道楽ではなく厳しい仕事によって培われ、時には道具のもつ世界について語り合ったり、茶室で一人自らの人生に向かい合うなど精神的な面での支えともなっていたでしょう。そんな明治の教養者たちに思いを馳せながら、一度明治村茶会へ足を運んでみませんか。

## 第40回 明治村茶会

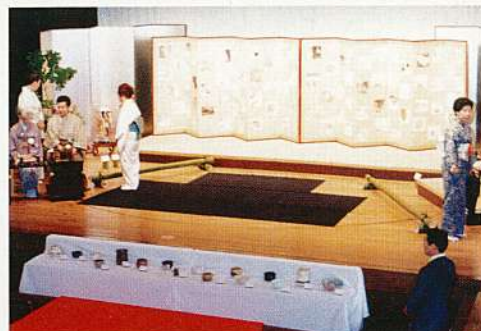
とき 平成18年4月21日(金)・22日(土)  
 ところ 博物館明治村(愛知県犬山市)  
 会費 15,000円(前売り券のみ)  
 内容 茶席三席・点心・模擬店



第37回明治村茶会 坐漁荘 亦楽庵席 平成15年4月



第21回明治村茶会 帝国ホテル中央玄関 昭和62年5月



第27回明治村茶会 呉服座 平成5年5月



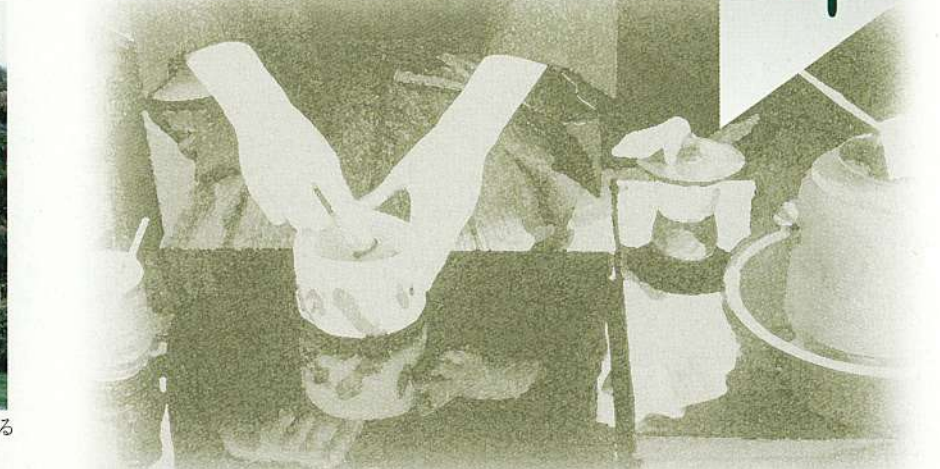
第37回明治村茶会 野点席 平成15年4月



第4回明治村茶会 この回より日本庭園にて野点席を設ける 昭和45年5月



第14回明治村茶会 聖ザビエル天主堂 南蛮美術茶会 昭和55年5月



第1回明治村茶会 長崎おらんだ屋敷席 昭和42年11月



展示資料

資料名	製作年	作者
1 長椅子		
2 椅子		
3 錦絵貼込帖 東京府中橋通街之圖／東京府京橋之圖／東京府銀座通之圖	明治元年	月岡芳年／年景
4 北陸東海御巡幸 石川県下越中国黒部川図	明治11年	三島蕉窓
5 錦絵 東京高輪海岸蒸気車鉄道図	明治 4年	三代廣重
6 横浜商館天主堂ノ図	明治 3年	歌川広重(三代)
7 東京築地ホテル館	明治 3年	歌川国輝
8 大日本内国勲業博覧會会場之圖	明治10年	揚洲周延
9 貴顕舞踏の略圖	明治21年	揚洲周延
10 帝国議会議事堂之圖	明治23年	楊齋延一
11 帝国議會御幸之図		揚洲周延
12 憲法発布式後市街御幸之圖	明治22年	揚洲周延
13 銀婚式祝典之圖	明治27年	安達吟光
14 五五大典銀婚式御式之圖	明治27年	梅堂小国政
15 大日本帝国銀婚式	明治27年	南齋年忠
16 手廻卓上ミシン	明治20年	
17 文箱	明治26年	日光金谷ホテル
18 ガイドブック	明治45年	日光金谷ホテル
19 タグ	明治40年	日光金谷ホテル
20 奈良ホテル サーバー用スプーン・フォーク	明治42年	
21 メニュー	大正元年	帝国ホテル
22 帝国ホテル ホテルの菜	大正 9年	帝国ホテル
23 帝国ホテル椅子	大正11年	帝国ホテル
24 バイオリン	明治43年	鈴木バイオリン製造(株)
25 箏曲 春の曲	明治41年	中尾琳三
26 箏曲 夕顔	明治41年	中尾琳三
27 箏曲 千鳥の曲	明治41年	中尾琳三
28 小椅子 竹塗り蒔絵入	大正 9年	
29 二〇三高地カツラ		
30 夜会巻きカツラ		
31 文官 大礼服一式 (武田五一使用)		
32 ガーディナー夫人 婚礼衣裳一式		
33 絵はがき集	大正10年	田辺淳吉等
34 葉書 (田辺 淳吉宛)		武田五一／大熊喜邦 等
35 吾輩は猫である	明治38年	夏目漱石
36 漱石自筆書翰	大正 3年	夏目漱石
37 シルクハット	明治30年	イギリス製
38 扇額「我猫庵」		菅虎雄
39 西園寺公望 煎茶提籃皆具		
40 西園寺公望文房具		
41 西園寺公望書簡 軸	明治14年	西園寺公望

※展示品は変更される場合があります。



ガーディナー夫人 婚礼衣裳

みてみよう！  
明治の建築家の人となり

明治を代表する建築家達は、とかく設計した建物のみが注目されますが、ここでは田辺淳吉に宛てられた、建築家達からの絵葉書を中心に、武田五一の大礼服など、彼らの姿を紹介します。

発見明治の偉人の遺愛品

明治村には森鷗外・夏目漱石住宅や、幸田露伴、西園寺公望の別邸、石川啄木の下宿した床屋喜之床など、明治時代の偉人が暮らした住宅やゆかりの建物が数多く移築されています。そして、建物だけでなく、西園寺公望の愛用した煎茶提籃皆具や夏目漱石のフロックコート、シルクハットなども收藏されています。こうした明治の偉人の愛用品は、彼らの趣味趣向を知る上で非常に貴重なものであり、まさに明治村の宝となっています。

**西園寺公望 煎茶提籃皆具**  
江戸時代から明治時代にかけて、文人と呼ばれる中国趣味に傾注した知識人や公家たちは、それまで

日本の喫茶の中心であった抹茶を離れ、煎茶を愛好するようになりました。写真の煎茶具は、明治、昭和初期、政治家として活躍していた西園寺公望が愛用したとされる道具で、すべてが左上の籃の中に収まるようになっております。竹を好んだ公望公の趣味が反映されており、当時の文人による茶会の様子を垣間見ることが出来ます。

西園寺公望 煎茶提籃皆具



夏目漱石のシルクハット

明治の文明開化の象徴としてあったザンギリ頭。それまで慣れ親しんだちょん髷を切り落とし、代わりに頭にはシルクハットをはじめとする西洋帽子が乗せられました。このシルクハットは夏目漱石が使用したものでフロックコート等と共に、遺族から弟子で東北帝大教授の小宮豊隆に形見として贈られたものです。小宮はこのことを非常に誇りに思い、これらを身につけた姿で記念撮影をしています。

企画展 明治を探る

お宝探訪  
明治村 展示紹介

明治天皇が崩御され、明治時代の終焉を向かえてから94年、「降る雪や 明治は遠くなりけり」という句を俳人 中村草田男が詠んでから約70年の月日が流れ、平成18年の現在では、昭和すらも遠くなっています。

今回の展示では、「探険」をテーマに、遠くなってしまった「明治」という時代を宮廷家具、明治時代の偉人の遺愛品、文明開化のシンボルとしてもはやされたものなど幅広く展示し、明治をより身近に感じていただきたいと思えます。今回はその一部をご紹介します。

探険明治の宮廷家具

数ある宮廷家具の中で特に、ここ最近の調査によって、使用されていた場所が明らかとなった有栖川宮邸(詳しくは「五ページをご覧ください)や赤坂離宮で使用された家具などを、その室内写真と共に展示致します。明治時代、一般の人々が決して入ることの出来なかつた宮廷内部をこれらの家具と共に探険してみてください。



赤坂離宮 朝日の間の椅子

明治時代を錦絵でたどる

木版画の一種である錦絵は、明治時代の町やそこに集う人々の様子が描かれ、その歴史や風俗を知る上で非常に貴重な資料です。特に明治という新しい時代を迎えた日本は欧米からの文化を取り入れ、社会、生活、風俗などが大きく変わり、その様子は当時の絵師達によって巧みに描かれています。今回は錦絵や文明開化の風俗資料で明治の歴史をたどりま

明治のホテルってどんなところ？

日本の開国と共に明治元年、外国人宿泊客を対象とした日本初の本格的洋風ホテル「東京築地ホテル館」が開業しました。その後も観光地を中心に近代的洋風ホテルが建設され、多くの外国人によって利用されました。

特に写真の日光金谷ホテルの文箱は、当時のホテルがどのようなものであつたかを知ることが出来る貴重な



文箱  
日光金谷ホテル



錦絵 東京築地ホテル館

資料です。  
日光金谷ホテルは明治六年(一八七三)、金谷善一郎が自宅の一部を外国人客へ提供したことに始まり、明治二十六年(一八九三)に「金谷ホテル」としてスタートしました。この文箱は客室に備えられていたもので、朱塗りの漆に鶴の金蒔絵が施されており、外見は和風ですがベン・インク押さえなど洋風の機能が入り入れられており、宿泊した外国人に喜ばれていたことが想像されます。

※1 各種の伝染病には、一定の病原菌が存在することを証明し、細菌学の基礎を築いた人物。結核菌、コレラ菌などを発見した。

※2 東照宮境内にある本地堂の内陣の天井に描かれた龍のちようど頭の真下で拍子木を打つと、「さるる」と残響音が響き渡り、それが龍の鳴き声のように聞こえる。

## 車寄せの反響

京都市電の京都七條駅の坂を登ると、そこに北里研究所本館（3丁目25番地）があります。明治時代、当時のヨーロッパでは細菌学が発達しており、それを学ぶためにドイツに留学し、コッホ※1に師事した日本人が多数いました。とにかく病気には何らかの細菌が関係しているとされ、顕微鏡を片手に日々細菌を発見することに力が注がれました。この建物の内部には、当時使われていた顕微鏡が多種展示されています。普通、大きな事務所や学校などの建築では、廊下を北側にとって明るい南側に部屋を作りますが、この建物の場合には逆で、北側に研究室、南側に廊下があります。これは、一日のなかで光に変化の少ない北面に研究室を配置したほうが、顕微鏡観察に適していると考えられたためです。

さて、今回この建物で注目するのは車寄せの部分です。皆さん、車寄せに立って一度手を叩いてみてください。すると、ピンと日光の鳴龍※2のように反響します。北里研究所の車寄せの場合、西洋流に見ると少々下手な天井蛇腹がつくられています。全体として湾曲した天井のようになっていて、反響します。天井が漆喰塗り、床がモルタルで、お互いに硬い材料なので音が吸収されないせいもあるようです。

一方、日光東照宮本地堂の場合、天井は檜材でつくられています。中央あたりがお椀状にへこんでいるため、反響するのだそうです。本地堂のように広い天井を一枚板で張ると中央あたりが下がった感じにみえます。実際に年月がたつと下がってくるので、それを見越してあらかじめ持ち上げつつあったので、鳴龍の状況ができたそうです。ちなみに床材は、かつては板で現在は畳ですが、反響に変化はないようです。

北里研究所の車寄せの音は、決して意図してつくられたものではありませんが、結果として同じような現象が起きています。明治時代、それまでの伝統的な寺社建築の手法を離れ、西洋風の建物が次々に建てられました。思わぬところで共通点が見つかり、興味深いものがあります。



車寄せ天井



車寄せ

## 軍艦島

長崎居留地二十五番館（3丁目31番地）の中に、通称「軍艦島」と呼ばれる島の模型があります。軍艦島とは、正式名称を端島といい、総面積は約63ヘクタール、長崎県長崎市の沖合に浮かぶ炭坑遺構です。明治時代から開かれた三菱財閥所有の海底炭坑の島で、石炭採掘のため周囲を埋め立てながら護岸堤防の拡張を繰り返して、現在の形になりました。海上から見たそのシルエットが、旧日本海軍の軍艦「土佐」に似ていることから、軍艦島という俗称で呼ばれています。

ここでは良質な強粘炭が取れ、産出された石炭は主に八幡製鉄所に供給され、隣接する高島炭鉱とともに日本の近代化を支えてきた炭鉱のひとつでした。

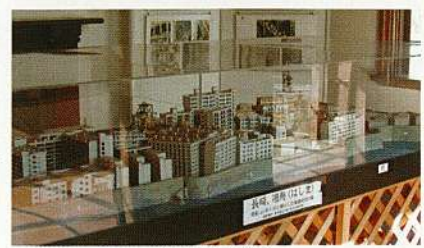
1916（大正5）年以降は、従業員の住宅として日本初の鉄筋コンクリートの集合住宅群（地上7階建て）の建築が始まり、それは第二次世界大戦中の物資が乏しい状況の中でも建設が続けられていました。最盛期には5300人が住み、その人口密度は世界最高（東京の9倍）にもなりました。さらに島内には作業場や住宅のほかに、7階建ての小中学校、共同浴場、公園などの公共施設、映画館などの娯楽施設、料理屋や販売所、神社、手術室完備の病院などもあり、島内において完結した都市機能を有していました。

1960年以降、主要エネルギーが石炭から石油へ移行し、それによって島は急激に衰退します。1965年に新坑が開発され一時的に持ち直しましたが、1970年代以降のエネルギー政策の影響を受けて1974（昭和49）年1月15日に炭坑は閉山しました。約2000人まで減っていた住民はその年の4月末までに全て島を離れ、現在は無人島となっています。

2001年、軍艦島は三菱から長崎市へ無償譲渡されました。無人化により長く放棄され現在では建物は廃墟と化しており、倒壊の危険性もあって立ち入りを禁止されていますが、近代化遺産として、また初期集合住宅の遺構としても注目されています。



集合住宅群



長崎端島模型

## 明治探険隊

期間／平成18年3月18日（土）～6月25日（日）  
後援／愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会

### 明治探険隊オープニングイベント

小沢昭一村長講演会「少年探険隊」

3月19日（日）13:00～ 聖ザビエル天主堂

小沢昭一明治村村長が、自らの少年時代のエピソードを交えて「少年探険隊」というテーマで講演を行います。

### 企画展「明治の探険家」展

東山梨郡役所2階

千島列島探険の郡司成忠大尉（幸田露伴の実兄）と南極探険の白瀬中尉の明治時代の探険家をテーマにした企画展です。パネルでの写真展示のほか、白瀬中尉らによる明治45年の南極探険時の映像を紹介します。

### 企画展「明治を探る－明治村お宝探訪－」

三重県庁舎

明治村に収蔵されている資料の中から明治の偉人の愛用品、宮廷家具など歴史的価値の高いものや当時の暮らしの生活資料などを展示します。

### SLバックヤード探険隊

開催日 3月25日（土）、4月15日（土）、5月14日（日）、20日（土）、6月11日（日）

集合時間／12:30（SL東京駅）〈終了14:00頃〉

対象／小中学生及び保護者（2名まで可）

〈小学3年生以下の方は保護者の同伴必要〉

参加料／お一人500円

（SL往復乗車賃込・入料金は別途必要です）

〈事前予約制〉



## 常設展示があたりしくなります

### 1 「明治の監獄」体験（金沢監獄中央看守所・監房）

囚人や看守などの人形とともに監房内や書信室も再現します。

### 2 常設展示「明治の燈台」（菅島燈台附属官舎）

三島由紀夫の「潮騒」で有名な、三重県にある明治43年初点灯の「神島燈台」レンズを菅島燈台附属官舎内で動態展示いたします。

### 「明治のトイレ」移設（長崎居留地二十五番館）

菅島燈台附属官舎内の「トイレの館」を「明治のトイレ」として、長崎居留地二十五番館内へ移設します。

### 3 「百年前立体写真館」（千早赤阪小学校講堂）

ご好評いただいております当時の風景や生活などが立体的に見える「立体写真館」を季節ごとにテーマを変えながら、展示いたします。

## ★ゴールデンウィークの明治村★

### 花のナイター

5月3日（祝）～7日（日） 20時30分まで夜間延長開村（17時以降入料半額）

建物・街並み、花のライトアップに打上花火、さらに教会ライティングショーや伝統芸能の公演などを開催します。

### ◎明治村春の芸能探訪 伝統奇術「手妻」呉服座公演

5月3日（祝）～7日（日） ① 13:30～、② 18:30～

国の無形文化財である「手妻」〈水芸などの日本の伝統的奇術〉の妙技を、芸術祭賞三度受賞の第一人者・藤山新太郎、すみれ親子等が、国の重要文化財の芝居小屋「呉服座（くれはざ）」で公演いたします。（有料・全自由席）

●予定演目：夕涼み・傘出し・紙片の曲・五宝蒸籠・蝶のたはむれ・水芸

●前売券：入村・鑑賞セット券

2,000円〈大人〉、1,500円〈65歳以上、高校生〉、1,000円〈小中学生〉

●当日券：1,000円〈高校生以上〉、500円〈小中学生〉（入料別途）

共催：東海テレビ放送・東海ラジオ放送・中日新聞社・（財）明治村

## シンポジウム

文化庁平成十七年度芸術拠点形成事業

### 市民に親しまれる野外博物館をめざして

－優れた建築文化をどのように継承し、活かしてゆくか－

●期日／平成18年3月26日（日） 13:00～16:30

●場所／博物館明治村内、聖ザビエル天主堂

基調講演 鈴木博之氏（東京大学大学院教授）

「建築の遺伝子－建築文化を正しく引き継ぐために－」

報告 国内外の野外博物館の調査報告

「日本の野外博物館を考える コロニアル・ウィリアムズバーグ（アメリカ）、スカンセン（スウェーデン）を調査して」

パネルディスカッション

パネラー 鈴木博之氏

加藤秀樹氏（財団法人四国村副理事長 慶応大学教授）

北川佳枝氏（元日本郵船株式会社小樽支店研究員）

飯田喜四郎氏（博物館明治村館長）



金沢監獄正門と花火